

News Letter

発行

認定NPO法人子どもシェルターモモ
〒700-0861 岡山市北区清輝橋1丁目2-9
電話・FAX 086-206-2423



CONTENTS

- ・巻頭言 1
- ・「理事ってどんな人?!」 2
- ・「モモの家」通信 6
- ・「おおもと荘」通信 6
- ・「あてんぼ」通信 7
- ・「en」通信 7
- ・事務局だより 8

■表紙絵「灯りの交換」内村 暁

巻頭言

おおもと荘について

認定NPO法人子どもシェルターモモ 理事長 東 隆司



おおもと荘は2009（平成21）年4月に開設した定員6名の男子用の自立援助ホームです。前年9月にNPO法人を設立後、法人として最初に開設した施設で、これまでに16才から19才までの男の子38名を受け入れ、自立を支援してきました。施設建物は築後50年以上を経過した農家住宅で、老朽化しているため、新たに施設建物を確保するための準備を始めたところでした。

そのような時に、本年5月、ホーム長が退職し、8月に更に1名の職員が退職しました。ホームには4名の子どもが入居中でしたので、新規に職員を募集するとともに、他のホームや事務局から職員の応援を求め、ボランティアの協力も得て、この間、何とかホームの運営を続けてきました。しかし、新たにホーム長の仕事を担当できる職員を確保する見通しが立たないことから、残念ながら本年9月末をもって、約9年間続いたおおもと荘の運営を休止することになりました。

現在入居中の子どもたちはいずれもアパートに引っ越し、一人暮らしをすることになります。自立できる状況ではない子どもについては、関係機関と協力し、当法人が運営しているアフターケア事業「en」で今後も支援を続けることとなります。途中で一人暮らしをせざるを得ない子どもたちには本当に申し訳ないと思っています。男子用の自立援助ホームのニーズは非常に大きいと思います。

そのため、当法人は本年7月の理事会で、1年後の2019年10月を目途に、新たに男子用自立援助ホームを開設することを目指し、プロジェクトチームを立ち上げることを決定しました。

プロジェクトチームでは理事を中心に研究者や建築士等法人の外部からも協力を得て、施設建物の確保とともに、自立援助ホームの理念についても、議論を深めていくつもりです。

皆様からのご協力、ご支援をお願いしたいと思います。



今年、設立10周年を迎えたNPO法人子どもシェルターモモの理事を今号と次号に分けて紹介します。理事の子ども時代を振り返って寄稿していただきました。(あいうえお順で掲載しています。)

～ 10年のあゆみ ～

- 2008年9月 団体設立
- 2009年1月 NPO法人認証
- 2009年4月 男子用自立援助ホーム「おおもと荘」開設
- 2009年9月 女子用子どもシェルター「モモの家」開設
- 2010年6月 女子用自立援助ホーム「茶屋町荘」開設
- 2010年10月 フォローアップ・アフターケア事業開始
- 2013年2月 認定NPO法人格取得
- 2014年7月 児童養護施設等退所児童アフターケア事業開始
女子用自立援助ホーム「茶屋町荘」休止
アフターケア相談所「e n」(えん) 開設
- 2015年1月 女子用自立援助ホーム「茶屋町荘」廃止
- 2015年10月 女子用自立援助ホーム「あてんぼ」開設

- 理事長 ○東 隆司 (弁護士)
- 副理事長 井上 雅雄 (弁護士)
- 理事 ○西崎 宏美 (NPO法人チャイルドラインおかやま理事長)
- 青野 雅世 (モモの家ホーム長)
- 石倉 尚 (弁護士)
- 市場 恵子 (岡山理科大学非常勤講師)
- 大重 耕三 (精神科医)
- 岡嶋 安起 (あてんぼホーム長)
- 河本 泰政 (弁護士)
- 佐原 啓理 (元中学校教諭)
- 白井 和年 (元児童自立支援施設職員)
- 中野 善行 (なかのクリニック院長)
- 長谷川 久子 (弁護士)
- 岡嶋 利和 (元中学校教諭)
- 監事 小橋 仙敬 (公認会計士)
- 近藤 幸夫 (弁護士)

※○がついている方を今号で紹介しています。

モモの由来

人々の話に耳を傾け、時間泥棒と闘い、ゆとりを取り戻した
ミヒヤエル・エンデ原作「モモ」が由来です。



モモの家内観(子どもシェルター)



市場 恵子 さん

幼いころは痩せて、病弱な子どもでした。好き嫌いも多く、給食に苦手な食べ物が出ると、「居残り室」で食べ終わるまで苦闘していました。外遊びが苦手な、本ばかり読んでいたためか、運動会では走るといつもボリ。鉄棒の逆上がりができたのはやっと小5になってからです。以来、自信がついたのか、球技や陸上・水泳も得意になり、高校では100mを13秒台で走っていました。人の可能性

は計り知れないですね。

小1の5月、「母の日」を前に、学校で造花のカーネーションが配られました。ほとんどが赤色でしたが、クラスに1人だけ白色の造花を渡された子がいました。その子が泣き出し、「私も赤がいい」と言うので、私の赤と替えてあげました。先生が「お母さんのいない人には白色」と説明され、「なんて残酷



な!」と子どもながらに憤りました。帰宅して母に話すと、母も自然に受け止めてくれ、ほっとしました。クラスに給食費を滞納している子が複数いることにも気づき、払えない子は払わなくて済むようになればよいのと思っていた。貧困はその子のせいではないからです。

私は女の子らしい遊び（人形やままごと）や手芸を好みませんでした。父が与えてくれたドイツ製の工具と金具で橋や鉄道を作って

遊んでいました。ちょっと変わった子だったかもしれませんね。

Profile

1951年生まれ

大学や看護専門学校で心理学などを講じる傍ら、行政の相談機関で心理相談・グループカウンセリング・スーパービジョンを担当

岡山県人権政策審議会委員

2008年 NPO法人子どもシェルターモモ理事に就任



岡嶋 安起 さん



私は、兄と妹に挟まれたいわゆる「なか児のひがみっ子」でした。妹とは意地悪をしあっては喧嘩ばかり。叱られ役はいつも私。でも2歳

違いの兄とは気が合い、兄の友だちに交じって、夏には近くの西川でメダカや鮎を捕ったり、お羽黒トンボを捕まえたり、道端のザクロをもぎって食べたりもしていました。放課後はランドセルを家に置くと、すぐ学校にひき返し友だちといろんな遊びを創りだし、17時に県庁から流れる「家路」のミュージックサイレンが流れるまで屋外で遊んでいました。当時は放課後、小学校の校庭で誰かが遊んでいた時代でした。

小さい頃の夢は、幼稚園か保育園の先生に

なることでしたが、選んだのは歯科衛生士の道でした。結婚して3人の子どもを授けると、同年代の母親たちと子どもと一緒に遊んだり、紙芝居や絵本の読み聞かせ、子育ての悩みを話すようになりました。我が家は母子の居場所・保育園状態となり、ある意味夢が実現したといった感じを持ちました。また、「子ども劇場」に入会し、舞台鑑賞、キャンプ、子どもまつりなどに親子で参加し楽しい時間を過ごしてきました。子どもが大きくなるにつれ、会の運営にも参加し…と、気が付けばわが子だけでなく、子どもの育ちに深く関わる日々を送っていました。その中で、「子どもって、自身で育つ力を持っている!」ということを感じてきました。こうした活動の延長線上でモモと出会い、今があると思っています。

Profile

2011年9月 子どもシェルター「モモの家」職員

2016年11月「あてんぼ」ホーム長

2018年4月 NPO法人子どもシェルターモモ理事に就任



旧おおもと荘外観(男子用自立援助ホーム)



あてんぼ外観(女子用自立援助ホーム)



事務局・アフターケア相談所「en」

白井 和年 さん

「私の幼少期の1ページ」

昭和24年生まれ、まだまだ貧しい時代であった。私の家も貧しく両親は懸命に働いていた。私は一人っ子で鍵っ子だった。

多分、5才くらいのことだったと思う。それまでもずっと自分たちの家はなく、親戚を頼って転々としていたが、この当時は母親の姉が嫁いでいった先の、結構立派な家の離れに住まわせてもらっていた。その家にはいわゆる座敷牢のような一角があって、そこにTちゃんという男性が住まわされていた。その家の長男だったと思うのだが、今考えてみて「知的障害」のある人だった。年齢はどのくらいだったのだろう、その頃の私にとっては歳の大きなお兄ちゃんといった感じでよく分からない。彼はほとんどの時間をその部屋で過ごしていたのだが、時々表に出て来て、私はよくその彼に遊んでもらっていた。家の前の用水路に入って水遊びしたり、近くの動物園に連れて行っても

らい、柵を乗り越えて入り遊んだりしていたことを憶えている。彼はその後、私たちがその家を離れた後しばらくして病気で亡くなったと聞いた。

私は大学に進み、卒論制作の一環でしばらく障害児施設に通うこととなった。そこで初めて知的な障害のある子どもたちと接する機会をもった。その中で、それまでずっと思い出すことはなかったが、久しぶりにTちゃんのことを思い出したものである。卒業後の進路に迷っていた頃であったが、この施設での経験が今の私の仕事人生に進んだきっかけであった。昔、Tちゃんにかわいがってもらった思い出も、少しはきっかけになったかもしれない。



Profile

1949年3月生まれ

1975年～2007年 岡山県庁出先機関「成徳学校」、「総合社会福祉センター」、「津島児童学院」、「中央児童相談所」で勤務

2008年 NPO法人子どもシェルターモモ理事就任

西崎 宏美 さん

幼少期に育った家は、黒住教の教会所で、お祓いやお参りに来る人、写真屋、父の茶道の仲間、お弟子さんたち…と人の出入りが多い家でした。父は自由になる時間が多いので、3人の子どもに絵本の読み聞かせや、折り紙などをして一緒に遊んでくれました。お風呂の時間は、神話や昔話、作り話等々「おはなし」の時間でした。小学生になるまでは病弱であったので、外遊びより家の中



で、過ごすことが多かったです。

私がモモに関わるようになる基は高校時代に培われたと思います。先生方の多くが学徒動員で駆り出され、学ぶ機会を奪われた挙句、8月15日を境に教えこまれた価値観を覆され

た世代でした。作業中に被爆した先生が3人おられました。先生方は「高校生といえども受験勉強だけしてはいけない。社会と繋がっていることを忘れるな」、「社会の一員として考え、自分の意見を」と、言われていました。授業は教科書を題材に考えさせ、自分の言葉で発表させ、討論させるといった内容が多くありました。1年生の夏休みの補習で「これまでの解釈とは違った解釈を!」と、「更級日記」の現代語訳を試みるといったこともしました。

社会の一員として考える訓練をした高校時代がなかったら、現在の私はなかったらと思います。先生の一人から「糞まみれなる安逸と、光り輝く悲惨、どちらを選ぶかは人間という自尊心」という言葉をもらいました。生き方を考え続けさせられている言葉です。

Profile

1969年10月 岡山子ども劇場の設立に関わる

2001年 チャイルドラインおかやまを設立

2008年 子どもシェルターモモ設立に関わる

2008年 NPO法人子どもシェルターモモ副理事長就任

東 隆司 さん

15才から18才までのころを振り返ってみると、両親の期待を背に、同級生に負けたくないという思いで、一生懸命受験勉強に励んだ灰色の時代でした。

中学から高校にかけて部活でサッカーをやっていました。サッカーに熱中したのは受験勉強のレールを走る群れの中で、受験勉強をしているだけではない自分を見つけたかったからだと大人になってから分かりました。

弁護士となって、非行を犯した子どもを支えるため付添人として活動する中で、虐待を受け、行き場所をなくした子どもたちに出会いました。

還暦を迎えた時、二つの夢を持ちました。

一つは、「子どもたちに夢を」を目標に設立されたプロサッカーチーム「ファジアーノ岡山」の応援。「J1」昇格、「J1」優勝、クラブワール

ドカップに出場し優勝して世界ナンバーワンクラブになること…夢は無限に広がります。子どもたちの夢は還暦を迎えたおじさんの夢にもなりました。

もう一つは、子どもシェルターを開設すること。「カリヨン子どもセンター」が東京に子どもシェルターを開設して以来、岡山に子どもシェルターをつくることが夢でしたが、2008年9月、NPO法人子どもシェルターモモを立ち上げることができました。

私にとって、夢多い子ども時代は還暦を迎えてから始まったように思えます。



Profile

1948年生まれ 総社市出身

1992年4月 弁護士登録 情報公開、子どもの権利に関心をもち、市民オンブズマンや子どもの権利擁護活動を行う
2008年9月 NPO法人子どもシェルターモモ理事長就任

間嶋 利和 さん

「私の大切な時間」

朝ドラ『半分、青い。』で、ヒロイン鈴愛（すずめ）が師事していた漫画家・秋風先生が、「余計なことする時間も回り道もあっていいと思う。いろんなことがあって、すべて今につながっている。」と語る場面がありました。日頃から「人生に無駄なことは一つもない。」と言ってきた私には心強い味方となる台詞のはずなのに、他の人の言葉として聞いたとき、一つの疑問が生まれたのです。

今の自分や状況を肯定的に捉えていればこそ受けとめられる言葉ではないだろうか、否定的に捉えている状態では何の意味ももたない絵空事ではないかと。私は、相手の現実に向き合うことなく価値観を説いていたのだと。過去を悔いていることに言及する前に、現在が少しでも豊かに感じられるような手助けが必要なのだと気づかされました。



さて、「昔～過去」の連想から横道に逸れてしまったのですが、テーマである私の幼少期の話を進めます。幼稚園に上がる前の3年余の間は、岡山の両親のもとを離れて讃岐の祖父母の家で暮らしました。大工の棟梁だった祖父の建築現場について行って、積まれた材木の上に腰掛けては墨壺の糸が弾けて線が引かれるのに見入っていました。また、釘も膠も使うことなく柱や桁・梁をつなぐ組木の鮮やかさは毎日見ても褪せることはありませんでした。また、嵐の夜でも庭を通り抜けて五右衛門風呂と便所の小屋に辿りつかなければならなかった思い出は、何故かシューベルトの「魔王」や映画「無法松の一生」の一場面とセットになって蘇るのです。

職人さんたちの技にワクワクしたり、不便な田舎生活を怯えて過ごしたり、あれもこれも、祖父母が私のために作ってくれた大切な時間だったのだと領いています。

Profile

1950年12月17日生まれ

1977年4月～2011年3月 公立中学校教員
2012年 NPO法人子どもシェルターモモ理事就任

「モモの家」通信

これほど暑い夏は初めてだというくらいの猛暑が続きました。「今年は蝉が少ない」というのがスタッフ間の共通認識です。それでも朝は早くからミンミン鳴くので子どもたちからは「うるさい。蝉の声で目が覚める」と不評だったりします。私としては目覚まし代わりに自然に起きられるので便利なんですけどね。

移転を経て再稼働しているシェルターも1年以上経ちました。久しぶりに子どもたちと過ごす中でこれまでは感じなかったことがあります。ひとつ目は、とても些細なことなのですが、(入所中の)人数が変わることで初めの頃は食事を作る量にとっても戸惑うのです。使用する鍋の大きさが変われば「これくらいかな」に自信が持てず、初心にかえって分量をきちんと計ってみたりして…。味付けにしても2倍になったからと自動的に調味料を2倍に増やせば良いとも限らないのです。更にそれぞれの子



どもの食べる量や味覚も考慮に入れるなど探りながらの作業になります。慣れた頃にメンバーが変わるので、また探り探り…を繰り返しています。

ふたつ目に、24時間を共に過ごすというのはすごいことだと改めて感じています。スタッフは24時間365日を交代で勤務しています。「密着24時」なので、何かよくわからないけど雰囲気というか空気感というか、表面上は変化がないように見えるのに何かを感じる…ということがあるのです。何か感じ取った時に不安になると、それがまた子どもたちに伝わっていくので要注意です。私が心がけているのは、自分自身の感覚にも敏感でいることと、チラッと感じたくらいでもすぐ他のスタッフに話してみることです。話すことで、自分ひとりでは見えなかったことが見えてきます。見えることで、心構えもでき、行き当たりばったりの対応とならずに済み、尚且つ「無力感よサヨウナラ」という気持ちにもなります。スタッフ同士で話すというのはとても大切なことですね。私たちがしているのは「チーム支援」だと実感する瞬間です。

これからもやって来る子どもたちを一人ひとり大切に迎えたいと思います。

(文責：堀 睦実)



「おおもと荘」通信

子どもの力を信じる

私がおおもと荘の子どもたちと関わるようになったのは、今年の4月に入ってからです。そのとき、おおもと荘には4人の子どもがいました。自分の夢に向かってひたすら努力をしている子、人とうまく関われないことに苦しんでいる子、一人が寂しくて誰かにそばにいてほしい子、自分の気持ちが出せない子、年齢も育った環境も状況も違う子どもたちが一緒に生活をしていました。

そんな子どもたちと生活を共にしながら、いつも、自分に何ができるのだろうかと考えさせられます。子どもたちの甘えやわがままにどう対応したらいいのかと悩んだり、子どもたちのやることが大丈夫だろうかと心配したりしますが、そんな心配をよそに、子どもたちはあっさり物事をやり遂げたり、自分で立て直したりします。そんな姿を見ていると、子どもたちには生きていく力があるのだと改めて思います。自分にできることは、そんな子どもたちを見守り、助けが必要なときに手伝うことくらいなのかもしれません。

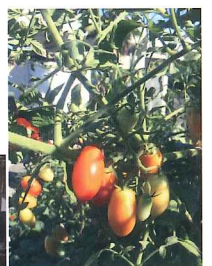
これから子どもたちは自立していきますが、彼らの力を信じ、見守りたいと思います。

支えてくださる方々

おおもと荘には畑があり、その畑を善意で手入れして下さる方がいます。その方のおかげで、この夏はナスやピーマン、ミニトマトがたくさん採れ、他のホームにもおすそ分けをしました。立派なスイカもできており、先日、おおもと荘で花火をした際に出したところ、子どもたちにとっても好評でした。また、桃やマスカットの差し入れもありました。子どもたちは「うまっ」とおいしそうに食べていました。

他にも、食事作りに来てくれるボランティアさん、自立の手助けをしてくれる方々、多くの方がおおもと荘を支えてくださっています。それがどれだけありがたいことか、今を生きるのに必死な子どもたちは気付いていないかもしれませんが、子どもたちが落ちついた頃に、ふと支えてくれていた方々の存在を思い出して、生きる支えにしてくれたらいいなと思います。

(文責：坂口 彩)



「あてんぽ」通信

「あてんぽ」の近況

自立援助ホーム「あてんぽ」ができて、10月で4年目に入ります。これまで19名の入所があり、15名の退所がありました。現在は4名の利用者がそれぞれの目標である就職、進学、将来の目標に向けて暮らしています。朝5時30分起床で仕事に行き、帰荘して夕食を摂り、翌日のお弁当作り、夜は次の目標に向かって学習するという方もいれば、来春の高校受験に向け、週に一回学習ボランティアに来て頂き受験勉強をする方もいます。それぞれ目標や歩みの速さは違いますが皆、前に向かって進もうとしています。3人の職員はそんな彼女たちにどんな手助けができるのか、今、何をすれば良いのかを常に考え話し合います。一人ひとりの大切な人生を一時でも預かっている責任も感じます。そう思うがゆえに、つい必死になりすぎて腹が立ったり、厳しい態度になったりして、「あ～！またやってしまったか」などと反省したりもします。紆余曲折しながら歩んでいく彼女たちと一緒に歩んで行けたらと思います。

この春、高校を卒業した方2名、就職が決まった方3名のお祝い会をしました。理事、ボランティアにも参加して頂き楽しいひとときを過ごせました。4月にはサウスビレッジにいちご狩りに行きました。とても良い天気です。美味しい苺をたくさん食べてお腹いっぱいになりました。7月には招待券を戴き木下大サーカスショーの見物に出かけました。酷暑の中でしたが初めてのサーカスでわくわくしながら観ました。帰り際に、出口にいた象とおっかなびっくりで記念撮影もしました。

その他のイベントではささやかな誕生日会もします。

と言っても好みのケーキを用意し、ろうそくに火をつけみんなでお誕生日の歌を歌い、本人は火を消すといったものです。照れくさそうにしていますがその瞬間はとても幸せそうな笑顔が見られます。



「あてんぽ」を出た後

7月に1名、8月に3名の計4名が退所して一人暮らしを始めました。あてんぽを出るときは一人暮らしが出来る嬉しさと不安で、気持ちが不安定になる方もおられます。退所後、「家にオープンが無いからクッキーを焼かせて」などを理由に来て、山の様におしゃべりをして帰ります。また、「淋しい」「あてんぽのご飯が懐かしい」と言ってきたり、「体調が悪い」「病院に行きたい」「一緒に買い物に行ってほしい」等、いろいろな連絡が入ります。ホーム長を始めとしてできるだけの対応をしていますが、退所者すべての要望には応えきれません。しかし、モモにはアフターケア相談所 en があり、en に行けば温かい雰囲気の中で、スタッフやボランティアとおしゃべり、悩みや困りごとの相談をしたりで、淋しさも少し和らいでいるようです。私たち職員は退所前から en の場所を知らせたり、スタッフとの顔つなぎをして、少しでも安心して一人暮らしができるように心がけています。

退所した方たちは、かたちの上では自立していますが本当の意味での「自立」にはまだ遠い彼女たちです。これからも応援し続けていきたいと思っています。

(文責：新山 尚子)

アフターケア

アフターケア「en」通信

勉強しています

en に集まってくる子どもたちが、いま頑張っているのが勉強です。ひとりの子どもが熱心に勉強をし始めたのをきっかけに、周りも刺激を受けて勉強をする子どもが一人、また一人と増えてきました。おとなが、「そろそろ真剣に将来を考えて勉強でもしたら」ということなく、自分たちの意思で始まった勉強会は、火が消えることなく目標に向かって頑張っています。

高卒認定を受けたいと思っている子どもや、通信制の高校を卒業したいと思っている子ども。社会に出て仕事をする中で、知っておいた方がいい学びを習得したい子。それぞれが目的を持って熱心に取り組んでいます。スポンジが水を吸うように、どんどん吸収していくスピードの速さは、教えている先生たち(元学校教師・ボランティア)も驚いているようです。

資格試験対策のため用意した本を、真剣な顔で取り組む子や、自分で持ってきた教材を読みながら、「わかった」「そうだったんだ!」と回答を導きだす子もいます。できたときには、教えているおとなも一緒になって喜びます。古くなった記憶をよみがえらせるというより、共に

学びなおしているようで、刺激を受けています。

そのような関わりの中で、子どもが将来の夢を語ってくれることもあります。高校卒業後に自分の将来の為に進学を希望しているとか、就職試験のために必要な資格を取っておきたいとか、具体的に目を輝かせて語る様子には意志の強さを感じます。スモールステップを重ねていって、夢を実現させるため大きく巣立ってもらえたら、うれしいなと感じています。

勉強後のおしゃべりタイムに、子どもたちとスイーツを作って食べるのも楽しみの1つ。ボランティアのひとりが、世界を仕事で回った話を聞いて異文化に触れる時は、目を輝かせて聞いています。好奇心いっぱいに新しい知識を吸収していく子どもたちの脳はうらやましくもあり、可能性を感じています。目標が達成できるように一緒に頑張って勉強し、将来の道標を自分で見つけられるように、応援を続けていきたいと考えています。ガンバレ・・・子どもたち!

(文責：東 りえ)



事務局だより

コストコホールセールジャパン株式会社より 250万円分の商品券と 100万円のご寄付をいただきました！

コストコホールセールジャパン株式会社からは全国15カ所の子どもシェルターに多額のご寄付をいただいています。子どもシェルターモモでも今年度よりご寄付をいただけることになり、7月17日にコストコ広島倉庫店で授与されました。各ホームに大きな冷凍庫を購入させていただき、しっかり食材を買わせていただいております。大きなサーモンでお寿司をつくったり、甘いココアでほっと一息入れたり子どもたちもとても喜んでます。



商品券を受け取る東理事長



精肉



サーモン寿司



ココアとはちみつ

JAMMINより 125,650円のご寄付 をいただきました！

2月26日～3月4日の一週間の期間限定で、子どもシェルターモモと京都のファッションブランド「JAMMIN」とコラボしてチャリティー付き商品（Tシャツ、パーカー、バッグなど）を販売していただき125,650円のご寄付をいただきました。



パーカーとバッグ

デザインは、デザイナーさんがモモをイメージして作成してくださったオリジナルデザインです。
“This moment, it is my life”「この瞬間こそ、私の人生」。13時までの時刻が刻まれたいろんな形の時計は、それぞれ異なる



Tシャツとバッグ



高校卒業、就職のお祝いとして自立援助ホームの子どもたちにもプレゼントしました。

イオン黄色いレシート キャンペーンに参加しています

このキャンペーンは、毎月11日に黄色いレシートを、イオンモール岡山の店舗に設置されている専用の投函BOXへ入れると、合計金額の1%が子どもシェルターモモに寄付されるものです。毎月11日にイオンモール岡山でお買い物の際は是非、レシートの投函をお願いいたします。

平成29年4月から平成30年2月の間に投函いただいたレシートでのご寄付33,300円は、あてんぼで使用するドライヤー、目覚まし時計、デスクランプ、スリッパを購入させていただきました。

編集後記

晴れの国岡山。災害のない岡山のイメージが一掃されてしまった今年の夏は、忘れられない夏になりました。皆さま、お変わりなくお過ごしでしょうか？子どもシェルターモモ事務局の前を流れている西川も、普段は魚が泳ぐような緩やかな流れですが、数日の大雨で水も茶色く濁り、道にあふれてしまうのではないかと心配するほど水量が増していました。幸いにも、事務局、他の3施設も被害はなく、アフターケアに関わる子どもたちにも被害はなかったです。

時期遅くなりましたが、被災された方々には心より深くお見舞い申し上げます。（東 りえ）

●ご寄付は金額の多寡に関わりなく下記へご送金頂ければ幸いです。

郵便振替口座 01370-4-52835 特定非営利活動法人 子どもシェルターモモ

（ご送金の際はお名前・ご住所・ご寄付である旨ご記入いただければ幸いです。）

この広報誌は（株）ベネシードの支援を受けて作成しています。